

大川平三郎先生略伝

(石山賢吉氏著 この人この事より)

財団法人 大平奨学会



大川先生略伝再刊のことば

丁度一年前、理事長室で池田理事長が除るに硝子戸棚から古いガリ版刷りの本書を取り出して読ませてくれた。これは「人間学」と銘打ち、昭和二十四年頃石山賢吉氏が著述した大川先生の略伝であった。間もなく四十七年度の奨学貸与生の選考、試験が始まるので、当会の特色である大川精神を当大平奨学会に縁があって参集した青年男女の奨学生諸君に読ませて、これを体得して貰い、更に後に続く後輩の諸君に伝えて頂き不滅のものとして致したいと念願していたので、これは格好の資料であると思ひ急遽リコピーして四十七年度第五回採用の諸君に、故先生口述の「余の体験したる出世学」と共に配布した。本書はこの当時は細字のガリ版で読み辛かったらうと思つたので、印刷して読み易くする。広く配付して本書が消滅して了わないようにする。平易な口語文であるから読者も何回も読み返せて記憶に残る。青少年が漢字の勉強にもなるなどと思ひ早く印刷をと考えていたところ、第五回生の態谷女子商業高校一年の高橋和代さんから理事長宛次のようなお便りがあつた。

……先日（一月二十日）は、あんな立派な総会（桜影会総会）に出席させて頂き、大先輩の方々の御話の数々大変勉強になり、これから見習わなければいけないような事などあり感心していました。（中略）頂いた人間学の本を読み返し読み返ししては、私自身の生活と結びつけ見習って居る次第です。これからも一生懸命頑張ります。……とあり、事務当局も刊行に勇気づけられた次第です。

これは表題にも断つてあるとおり、飽しまで略伝で青年時代の頃までは詳細に書いてあるが、近代日本経済の揺籃期に洋紙製造事業の開拓者として壮年時代鬼神の泣かせる御活躍の詳細、また後半生は日本鋼管を始め六十有社の社長、相談役として大正、昭和前期に於ける我国実業界の一方の雄としての御動静の有様については本書は伝えていない。無論埼玉県下に於ては、渋沢子爵に次ぐ第二の偉人であつたことは、正伝として故竹越与三郎先生著「大川平三

郎君伝」四六〇頁、昭和十一年九月発行、発行所は丸の内一の二、大川事務所内「大川平三郎君伝記編纂会」非売品、現在絶版に詳細記述されてあることを附記致します。

大川育英会（現在大平奨学会）について

大川先生は、郷土への報恩について、自らが少年時代独学辛苦した（余の体験したる出世学を是非併せて読んで頂きたい）ことに思いを馳せ、我国将来の興隆は有能なる人材を育成して、これを社会の各方面に送ることにありと着眼せられ、これには郷土埼玉県下に於て有能なる青少年に学資を交付して、経済的に救援することであると、大正十四年二月十八日金五拾萬円（今日の五億円以上か？）を醸出されて財団法人大川育英会を創立されましたが、果して終戦時まで門下生は四一〇名に及び現在幾多の知名の方々が政界、産業界、教育界等各方面に活躍して居られます。先生が遺された尊い事業も、先生の御逝去と終戦時の混乱時代中絶の止むなきに到りましたが、昭和三十三年四月、現在の理事長池田新一氏を始め、嘗て大川育英会の恩恵に浴した桜影会の有力人士が相寄り、各自寄附金を醸出して再建し昭和四十三年始めて県内の高校生三名を採用し爾後監督庁埼玉県教育委員会の御指導の下に逐年奨学志望の高校生を増加しつゝある現状であります。

昭和四十八年六月

東京倉庫運輸株式会社内

編 集 部

「先生ッ」

と呼んで、一人の生徒は立ち上った。

「先生は、今二天作の五、二進が一進と教えられましたか、それはどういう意味ですか」と問うた。先生は答えて窮した。

だが生徒に対してわからないとも云えないので

「それは割言葉で、そう覚えておけばよいのだ」

と答えた。この答は少年を満足させなかった。

少年は、「二天作の五、二進が一進……」

と口の中につぶやきながら頭の中にその意味を考えた。翌日学校へ来て、少年は、再び「先生ッ」と呼んで立ち上った。

「二天作の五の意味は、わかりました。一を十とする。すると二が十の中に五つある。それで一を二で割る場合、二天作の五といって、一を払って五をのけるのでしよう。どうです先生、私の考えが間違っていますか」と先生に逆襲するような態度でいった。先生はその少年の頭のよさに、感服してしまった。

「全くそのとおりだ。白状すれば、先生は今まで、割言葉を丸暗記して、その意味を考えなかった。君が少年の身で、そこまで考えついたのは感心だ。先生以上だ」とすなおに、その少年を激賞した。少年は先生に望まれて、他の割言葉も解説した。

「三三三重の一は、十の中に三が三つあり。それを引いて、なお一つ残るから、そう割言葉を作ったのだ」

先生に推賞された少年は、その場で、割言葉を全部解説して了った。同級の生徒よりも先生の方が舌を巻いて驚いた。これより、その少年は神童と云われた。

神童はその名を大川平三郎といった。その学校は、武州松山藩の藩校であった。

神童の父は、剣術指南の先生であった。神童少年は肩巾が広かった。だが額が張って、眉が濃く、その下に涼しい眼を宿して居た。それがその少年の智能を物語った。

(二)

嘉永安政の頃、埼玉県の熊谷近くの箱田村に秋山要助という劍客が居った。附近の農商民に撃劍を教えて居た。

その頃農商民に撃劍を学ぶ者が多かった。それは、徳川政治三百年の太平が農民の自主的精神を振興し、その地位を高めた結果である。勿論当時の農民は、今日の如く何ものも恐れぬというほどの地位には達して居なかつた。磯馴松のその如く、天に向つて枝葉を伸ばさずとも、左右に勢力を張って居た。その中には、隠然武士と対峙してこれを凌ぐ郷士の如きものも居た。そして郷土をめぐる農民は、郷土気分を養うために、撃劍を学ぶのであつた。その他自衛を目的とする護身のためもあつた。

埼玉県に連らなる関東諸国は、天領の土地と諸侯の土地とが入り交つて居り、その諸侯には、大名よりも小名が多かつた。天領には、領主が居ないで、代官がその土地を治めるのであつた。代官も小名も、人民に対する威力は少い。自然これ等の土地には博徒、強盗が横行した。

村の人々は、それらの襲撃に備えるためにも、撃劍を習つたのであつた。以上のような次第で、秋山要助の門は賑つた。

要助の弟子に小鮎栄次郎というのが居た。所謂要助の高弟で免許皆伝の腕前であつた。その小鮎が二十二才の時、

三芳野村なる大川家の養子になり、名を平兵衛と改めた。平兵衛の子は修三といい、修三の二男は平三郎といつた。その平三郎が、割言葉の解説で先生から推賞されて神童といわれるようになったのである。

平三郎の祖父平兵衛は、山に入って強賊に出逢い手練の撃劔によって、一刀で斬り伏せて了つた。

またある時、山道に差し掛つた際、獵師に打たれた手傷の猪が、向うから飛んで来た。平兵衛少しも驚かず泰然と待ち構えて居て、正面にさしかかるや、軽く身かわし、難なく猪を仕止めた。これで平兵衛の名が大いにあがつた。

(三)

大川平兵衛の息修三も、秋山要助の門に学び免許を得た。彼も撃劔の逸材であつた。

親子で撃劔を教えたため門人が集まり、その数が三千人に達した。

だが家計は苦しかった。門弟三千人といつても、それは数十年に亘る累計である。門弟は、入門の際、銀一分を上納するだけで、別に月謝を払うわけではない。但し到来物はある。糯米を持参するとか、南瓜を持参するとか、或は野菜と、絶えず物は貰うが、金銭の奇進はないので家計は貧困であつた。それにも拘らず一家は大世帯であつた。平兵衛が隠居格になり、修三が一家の中心になつた時代のことである。修三夫婦に、親夫婦が二人、他に修三の妹が一人、修三の子供が三人一家八人であつた。

この貧乏世帯を修三の妻女が切り廻した。修三の妻女は、みち子といつた。尾高家から嫁入りした人である。そして三人の子を設けた。長男英太郎、次男平三郎、三男栄八郎といつた。次男の平三郎が本文の主人公である。尾高家は富裕であり、嫁入りの際は、相当な仕度をして来たが、子供に役立つものは、直して着せるというふうで、自ら子供の足袋を縫い、下駄の鼻緒さえも作つた。平三郎が六才の時、真夜中にふと眼を醒すと、薄暗い行

燈の下で母親一人が下駄の鼻緒を作っている。思わず涙にくれ、大きくなったら、母を大切にせねばならぬと、心に誓ったということである。

三人の子供は母親の家事を手伝った。然し母親の苦痛は、それよりも姑の圧迫であった。貧乏と圧迫に堪え兼ねて、母親は遂に家を出る決心をした。その時平三郎は七才であった。母との離別を悲しみ、極力引止めて、遂に思い止まらせた。

かかる家庭に成長した平三郎は、自らその境遇に性格を陶冶され、後年無類の蓄財家となった。

(四)

大川家は、貧乏なので近所へ貰い風呂に行った。行先は油屋であった。油屋の主人は、土地の物持であり、また顔役でもあった。いつも絹の着物を着、袂に貨幣をだぶつかせて大道を活歩し難儀をしている人があれば、惜気もなく金をやるので非常な人気だった。ところが気の毒にも、その妻君が酒乱であった。平素はおとなしいが、酒を飲むと乱暴をする。それでも家附の娘なので、どうすることも出来ないのであった。

その日の夕方又酒乱が始まった。平三郎が湯に入って居ると疍高い声がして、続いて皿小鉢を投げつける音がある。平三郎は湯から上ってそつとその前を通り抜けた。「お母アさん」と娘が泣いて母親を押しつけて居た。店頭には七、八人の人だかりがして、家中の騒ぎを面白そうに見て居る。

平三郎はその時十三才だった。だが大人のようにまかせて居た。家中の騒ぎを見られるのを気の毒に思い、静かに人払いをしてやった。その態度を見て、油屋の主人は、感心してしまい、かねて神童という評判も聞いて居るので、或日平三郎の母親をたずね、東京へ出して学問をさせることをすすめた。勿論、そういうからには、学費は油屋の主人が出してくれる腹である。

大川家は油屋の好意を受け入れ、平三郎を東京へ学問に出した。その時平三郎は腰に一本打込んで家を出た。大川はまだ棄てなかった時代であった。しかしチヨン鬻は切って居た。

さん切り頭を叩いて見れば

文明開化の音がする

と当時唄われた。

落ち着く先は渋沢家。渋沢家と大川家は親類であった。

武州手計村に尾高という豪農があり、主人惇忠の妹みち子が大川修三に嫁し、その妹千代子が渋沢栄一に嫁し、その関係で両家が親類となったのである。

これより大川少年奮闘の巻となる、そこに学ぶべき多くのものがある。

(五)

大川平三郎が東京へ学問に出たのは明治五年十一月一日、十三才の時であった。渋沢家に寄寓し、本郷の壬申義塾に通ってドイツ語を学んで、漢学は家に居た際、一ト通り習い終った。三字経から始めて大学、中庸、論語、孟子に進み、五経も少し習って先生格に達して居た。

壬申義塾に、ハアンというドイツ人が居た。平三郎はハアンについて大学南校に転じ、ドイツ語の会話と地理と歴史を学び、傍ら英語も自修した。かくすること二年半、どうやら独逸語が出来るようになった。

一方松山の太田家は、その頃貧乏のドン底へ落ちた。剣術指南ではどうにも生活が出来ないので平三郎の母はそと東京へ出て妹の渋沢夫人を尋ね、十円二十円と金を借りて帰るのであった。渋沢夫人も度かさなるので、平三郎を捉え「お前のお父さんもネ」と父の無能を口にする。それを聞いて平三郎は、父よりも母が不憫で堪ら

なかつた。断然学校をやめて月給取りになり、少しでも家の暮しを助けようと決心した。平三郎が上京した翌年の明治六年二月、東京府下の王子に、製紙会社が出来た。彼はそれへ入社させて貰った。当時は未だ株式組織が発達して居らず、合資組織で会社が創立された。三井、小野組、島田組の三家が出資して十萬円の会社を創始したのであった。当時でそれだけの資本金で足らず、明治八年に二十五万円に増資した。機械は外国へ注文した。

(六)

一家の貧乏苦が心魂に徹して居る平三郎は、立身出世に一生懸命である。彼は如何にしたら立身出世をするかを考えた。

会社に勤めて立身出世するには、第一に上役の氣に入ることが必要である。

彼は王子製紙に勤めるようになってから、渋沢家を去って副支配人の家に寄寓した。

副支配人は増田安久といった。王子に海老屋という料理店があり、増田はその別荘に生活して居た。

平三郎は、朝早く起きて先づ庭の掃除をする。主人が起きると、寢室へ飛び込んで行って、夜具蒲団を片付け、手早く室内の掃除をして机の上まで整理し、主人が顔を洗って帰ったら、氣持ちがよいようにしておく。

それを毎日実行して一日も怠らなかつた。

目的どおり大いに主人の氣に入った。聞けば、渋沢の甥だという。普通ならば、それを肩に着て威張るところを反対に克明に働く。その上、会社の勤め振りが抜群である。氣に入りの程度を越して感服される人物となつた。平三郎が最初当てがわれた仕事は、製図の助手であつた。だが製図は会社の重要な仕事ではない。会社の重要な仕事は抄紙である。それは会社の最高位にある外人が担当している。抄紙技術を覚えなければ、会社の重要人物になれないと考へ、自ら志願して機械を扱う職工となつた。

当時王子工場に二人の外人技師が居た。

一人をチースマンと云い、他をポットムレーといった。チースマンは英国人で、機械技術、ポットムレーはアメリカ人で抄紙技師であった。

ところが二人とも学問だけで実地の経験がない。殊に、ポットムレーは、原料製造の方で、抄紙には無経験であった。機械の据付を終って運転しだすと故障百出、紙が出て来ないのであった。

(七)

平三郎は、工場の職工になると、一人で十人の働きをする仕事を考えた。

土工はテコというものを使う。テコ八人といってテコは八人力を出す。一本の棒でも使い方によって人の力を八倍にする。

「智能だナ」と平三郎は気付いた。

さて、工場にテコの仕事はないか—平三郎は工場を見渡した。そこに一つ馬鹿らしいことが存在しているのを見した。

工場は毎朝八時の出勤である。だが出勤しても、機械が動き出すまでは、遊んでいる。機械は蒸気が起らないうちは動かない。蒸気は蒸気ガマに石炭を焚いてから起る。八時に出勤した職工が石炭を焚き、蒸気が起こって始めて機械が動き出すので、それまで他の職工は手を空しくして遊んでいるのであった。

平三郎は「テコ八人はここだ」と思った。翌日から彼は副支配人の許しを得て、早朝に出勤し、蒸気ガマを焚いて職工の出勤を待った。そのため職工の就業が一時間早まった。

だが肝腎の抄紙機械が、故障続出で、なかなか紙が出て来ない。それには流石の渋沢も閉口し大川少年を捉え、

「王子製紙には困り果てた。どうしたらよいか見当がつかない」と歎声を洩らした。この歎声を聞いて平三郎は奮起した。死力を尽して、この難関を突破しようと決心した。

それ以来平三郎は、終日機械の側に立って運転を注視した。算盤の割言葉を自ら解釈するほどの天才児だから、それで忽ち抄紙機の機械作用を理解して了った。

その結果、平三郎が手さえ触れれば、機械が動き紙が出るようになった。

(八)

大川少年の努力で機械の故障が除かれて紙が出だした。さて、こうなると次の問題は機械の調節である。紙には色々の種類がある。上質、中質、下質と厚薄である。質は原料の配合により、厚薄は機械の回転数によって決定するものである。大川少年は外人技師のやり方と実地の出来工合を見て、一々その方法を手帳に書き留めておくのであった。

当時は今日ほどの大量生産ではなかった。千差万別の注文が来る。そこで原料の配合と、機械の回転を頻繁に変更しなければならぬ。大川少年が手帳を見、それを器用に捌いて行くのであった。

工場の人々は舌を巻いた。偉い少年が飛び込んで来たということになり、工場の大評判になった。その結果一番下部に居る少年職工が、一番上部に居る人の実権を握るようになった。大川少年は、右のようにして工場に精励した。それと同時に科学の勉強も怠らなかった。

ある時、大川少年は、小石川から水道橋を渡り小川町の方へ行くとき、古本屋にガノーの窮理書を発見した。大枚七十五銭を奮発した。当時の七十五銭は、高価な書籍であったのである。読んでみると非常な難解である。その時、大川少年は維新前の洋学者を思い出した。伊藤玄朴や桂川周甫などは、自ら字引を作って蘭学を勉強した。

今日は字引のある時代になっている。独学の出来ぬことはない。——と思ひ、字引と首引で読んだ。そして、かねて自分の胸に、わだかまって居た疑問に解答が与えられて愉快であり、更に眼前に新天地が開け、益々愉快になった。

外人技師が馬力馬力という。十馬力とか、二十馬力とかいふのである。それは一体、何を基本にしたものか、算盤の割言葉に疑問を起こしたと同様、大川少年はその根源を知りたかつた。これを外人技師に聞いても、藩校の教師同様、解答をしてくれない。何事も元まで糺さねば承知しない性格だから絶えずそれが気になって居た。然るところガノーの窮理書を読んだら、忽ちこの疑問は解消し、更に色々の外国書籍を読んだ。だから大川の基礎知識となったものは、ガノーの窮理書で、これが一番役に立ったということである。

(九)

大川少年の活躍によって外人技師は浮き上ってしまった。断つて本国へ帰つて貰つては……と大川少年は、上役に献策した。当時外人技師の月給は二百六十五円であつた。大川少年は初給五円、後技能を認められて一円の増給、その後更に昇給したが、その程度は知れたものであつた。日本人は最高級者が二十五円であつた。外人技師にはずば抜けて高い俸給を支払つて居たのであつた。

大川少年の献策は容れられて外人技師は本国に帰つた。それから数年の後、大川は社命によって米国へ視察に行つた。その時、その技師はわざわざ大川を訪ねて来、我家へ立寄れといふので彼の家を訪れた。彼の地位は工場の夜警に過ぎなかつた。王子工場の仕事ぶりと思ひ合せて、苦笑を禁じ得なかつた。

明治十二年に米国前大統領のグラント將軍が、日本へ来遊した。その時日本を挙げて將軍を歓迎した。特に明治天皇は浜離宮に將軍を招き、唯一人の通訳を間に置いて歓談された。

この年大川は、社命によって製紙事業の視察に行つた。それは大川が重役へ意見書を出した結果であつた。意見書は七万語に及ぶ長文であつた。読むと、誰でも、米國へ製紙事業を視察にやる必要を感じるように書いてある。曰く外國製の紙は滑かで、ち密で且つ光沢がある。そして水に入れて乾燥しても、日本製の如く皺くちやにならぬ。焼けば灰になり方が違ふ。原料の配合が違つては相違ない。同時に又装置も違ふのであらう。装置の主要分をなす被布は、木綿であるが、木綿は産地によつて性質を異にする。外國で用いては被布はどんなものか、原料の配合はどうして居るか。

製紙原料に麻を加えると抄き易くて、紙質もよくなる。だが日本には麻が少ない。百分の五以上の混入は不可能である。外國ではどの位麻を混入しているか外國でも、多量の麻を混入することが不可能であれば、代用品があるに相違ない。あつたら、その代用品はどんなものであるか——と、いったようなことを書いたものである。今までの意見書のように、議論だけでなく、一々具體的の事例をあげている。この意見を読んで、重役はスツカリ感心してしまい、早速、大川を米國へ製紙事業視察にやることにしたのであつた。その時大川は二十才に過ぎなかつた。

(一〇)

大川は明治十二年六月某日、米國に向つて出発した。その時職工が七—八十人、新橋駅まで送つて来た。そして万歳を唱えた。社員は一人も送つて来なかつた。正午頃、横浜寿町の浅野石炭店に立寄つた。故浅野総一郎が夫人の手料理で昼食の御馳走をし、船まで送つてくれた。

二人は、どちらも節約家であるから、二人乗の人力車に乗つた。二人共大男である。その上中間にトランクを置いた。しばらく走つて寿町の橋へかかると車の心棒が折れて二人共路上に投げ出された。幸いに怪我はなかつた。

他の車を雇って、辛うじて波止場に着き汽船ゲリーング号に乗った。

船が陸を離れて身辺に人が居なくなると、忽ち新橋駅頭のことを思い出された。職工が多勢で見送りに来たのに社員は一人も来なかった。畢竟、自分が破格の抜擢を受けて洋行させられるからである。多数の反対を受けては何事も出来ない。これは大いに気を付けねばならぬことだ。自分一人が抜擢されて外国へ行くからには、外国へ行って習得した智識を会社に居残っている人に、分けてやる心掛がなければならぬ。これまで洋行した人は、外国で修得したことを秘伝とし、これを人に伝えない。そしてそれを出世の資にした。そういうことはいけない。自分を没却して自分が外国で見聞したことを全部報告しようと思ひきめた。

そこでいよいよ米国に上陸して種々見聞するや、一切を記録して本社に報告した。当時船便は二週に一度であったから船便毎に報告を出し一度も怠らなかつた。

それから一年半の後、帰朝したところ、新橋駅頭は社員の出迎で一ばいであつた。

桑港に上陸、汽車ロッキーマウンテン山脈を過ぎ、ニューヨークに向つた。

その当時汽車に軍隊が乗って居た。インディアン襲撃に備えたのであつた。又当時汽車に食堂がなかつた。食事は、停車場前の食堂でやる。その時列車ボーイが「二十分間に食事を済ませて下さい」と大声に注意する。それほど呑気な汽車であつた。

私は先年樺太を旅行した。汽車が或停車場に到着すると、同行の一人が停車場前のそばを見て「そばでも食に行こうか」という。それほどに、樺太の汽車は停車時間が長いのであつた。当時の米国の汽車も樺太の汽車に似たようなものであつたらしい。

大川青年は、汽車に七日乗ってニューヨークに着いた。今日は、ニューヨークから日本へ三十六時間で来る。それを更に二十四時間に短縮しようとしている。昔四週間かかった旅である。アメリカの進歩は、大したもののである。大川青年は、それから一年四ヶ月各種製紙工場の見学をした。然しその見学は、工場勤務をしながらであったから、報酬を得つつ実地の学問をした訳である。

その時得た報酬は一日一弗卅五仙位であった。日本の一月六円に比較すれば、えらい昇給であった。勿論報酬が目的でないから、その工場の仕事を覚えれば、他の工場に移り、変った工場を求めて見学に渡り歩いた。かくして、日本へ帰ってもよいという自信を得たので、明治十三年十月に帰朝した。帰朝談の一節に次の如きものがある。

「この会社は、ニューヨークのシヤワングム会社、麦蘗を原料としそれが全部で、他の原料を少しも使わない。附近の麦蘗を買集めて白紙を製造して居る。全米中唯一の麦蘗紙製造工場であった。この工場には事務員が一人も居ない。一人の社長と一人の技師長が居るだけである。

社長の家は、遠方であり、工場のワキに下宿をして居るので、自分も、その下宿に同宿させて貰った。そして、そこに一月ばかり居り、親しく社長の行動を目撃した。

近所の百姓が、麦蘗を馬車に積んで持って来る。社長の部屋の窓下に大きな計量器を据附けしてあり、馬車台ぐるみ目方を測る。丁度社長の腰掛けて居るところに分銅があり、社長は居ながらにして目方を測り、「オー、ライ」とか何とか云って、一々それを記録し、迅速に捌いて行く。非常な事務簡捷である。かくして社長は、原料の買入を自分一人でやって居る。工場の方は技師長のトランターというお爺さんが、一人で受持ち、日々の作業を進行させている。時は夏で、暑い盛りであった。初出勤の日、作業を終って湯に入ろうということになった。

その村には湯屋がない。社長が私を水車場へ連れて居った。そこに余水の出る所がある。それで水浴するのであった。初対面の私と、社長が互いに背中の中の流し合をした。

その時は今より七十年前であった。当時に於て、既に米国にはそれほどに専門工場が発達して居たのであった。事務簡捷も行われて居た。同時に、農村工業も発達して居たのであった。

(一一)

大川青年は、米国滞在中、王子製紙から毎月五十弗宛支給された。工場見学といっても、その実(じつ)工場に勤務するのだから、職工として毎日一弗廿五仙位宛給与を受ける。それを大事にして使わない。どこへ行ってもホテルに泊らないで下宿に泊る。かくすると一週二弗以下の食事で足る。本国からの送金は丸々残して貯金することが出来た。それが母へのお土産である。

大川は、少年時代から、母の苦勞が身に泌みて居る。何とかして母を楽にしたい。それには、自分が出世して多大の報酬を得、母に生計費をやるより外ない。この一心がある処へ、自分の尊敬する渋沢栄一から貯金をすすめられたのが又身に泌みた。

渋沢栄一は、明治六年に当時大蔵省の事務総裁であった大隈重信と意見が合わないので大蔵省をやめた。それから三井小野兩族と相談して、第一銀行を創立しその頭取となった。

以前と違って時々閑(ひま)が出来る。大川少年を相手に将棋を指す時間があるようになった。従って雑談もする。その一つに。

「勤儉により先づ三千円の金を蓄えよ。三千円貯蓄し得れば、一人前の人間と云える。だが三千円貯蓄するのは非常な苦勞だ。そこまで行けば、それから先は案外楽だ」といったことがある。大川少年はそれを深く肝に銘じ

たのであった。しかし、かくいった渋沢は、案外金銭に執着のない人であった。それに就いてこういう逸話がある。

小野組の番頭に、古河市兵衛というのが居た。この人は明治になってもチヨン髷を切らず、洋服も着ず、袴もはかず、何時でも着流しで、渋沢の所へ出入した。当時渋沢の宅は、兜町にある第一銀行の裏にあった。いよいよ小野組が潰れるとなったとき、二晩も三晩も続けて渋沢の所へ来て、夜を徹し、朝になって帰って行く。その時、市兵衛の姿はヤツレ果て石につまづくと倒れはしないかと思われる程であった。かくして小野組は遂に潰れた。市兵衛は独立して、足尾銅山を開発することになった。その時渋沢に出資を頼んだ。市兵衛と渋沢と三萬円宛出資して足尾銅山の開発に当った。

すると、僅か二十尺堀り進んだだけで大鉱脈に堀り当り古河家は隆々として発展した。それから十数年の歳月が流れた。明治二十四―五年の頃である。古河市兵衛は、或る日渋沢栄一を訪うて、あなたの出資金三萬円を、五十萬で市兵衛が譲り受けたいと申出た。渋沢は左様な大金を受取る訳には行かないと云って承知しなかった。さうさん押問答の末、漸く渋沢が受取り、渋沢はその時始めて五十萬円の財産家になったということである。

(一三)

大川青年は、アメリカから帰った時、胸に大きな金ぐさをぶら下げて来た。爾来幾十年も持ち続けた。帰朝当時は飾にもなったが、段々年ふるに従って旧型と化し、はては目ざわりになるようになった。でも決して新品と変えなかつた。それには勿論わけがある。それは貿易界の偉人を記念するためであった。大川青年がアメリカへ行った時、ニューヨークのダンタウン八丁目に、一団の日本人が居た。いずれも、非常な意気込みで、大金を儲けて日本へ帰へると云って居たが、さてこれという人物は居なかつた。その中に一人傑出したのが居た。それは

森村豊であった。短軀赭顔、氣力眉に溢れ、見るからに働けそうな男であった。ニューヨークの六丁目に店を出し、荷物の解きほどこきから、商品の陳列まで自分でやり、閑さえあればポストンやボルチモア・ヒラデルフィヤへ見本を持って商（あきない）に行く、後に果して大成功をした。

兄の市左衛門は、海外貿易発展の功績として男爵を貰った。だが豊はそれに先立って死んだ。その点は不幸だった。

大川青年は、時々、森村組の店へ遊びに行った。どちらも努力家だから話がよく合う。或る時、豊は、大川青年が時計だけ持って居て、くさりのないのを見て僕のを譲ってやろうという。それは上等の金ぐさりであった。洋行記念にもと、喜んで譲って貰った。輪の荒い、大型物である。価は二十五弗であった。毎月本国から送金して来る半分のそれを投じたのだから、大川青年としては非常な奮発であった。

後年森村市左衛門が死んで、息子の開作の時代となった。その時森村家の記念に、そのくさりを譲受けたという話もあった。磨いて綺麗にして森村家へ寄附しようということだったが、その後どうなったか、筆者はその消息を知らない。

大川青年は、帰朝して新橋駅へ着くと、人力車を駆って、直ちに渋沢邸を訪うた。玄関から入らず以前の如く台所口から入った。そして書生部屋に控えて居た。やがて奥から呼びに来た。彼は次の間に平身低頭し、それから座を進め、

「出発の際書き留めて行った研究科目を一ト通り彼地で学習して来ました。最早大丈夫である。御安心を願います」

と渋沢夫人に報告した。

渋沢夫人は即ち彼の叔母である。この叔母は男まさりの気性で、よく大川青年に「お前の父は無能の劔術つかい

で一家を潰した」というのであった。それだけの婦人だから、大川青年が大役を果し帰国したことを喜び、その夜から、お客様扱いにし、客間へ通して、絹布の夜具に寝かせた。その時大川青年は、暫し感慨の涙に暮れた。

(一四)

渋沢家に、帰国の第一夜をあかすと直ちに、母に会った。挨拶よりも先きに、洋行中に貯めた金を母の前に出した。大枚千円―その頃の千円は大金である。母は涙を流して喜んだ。その顔を見た時の嬉しさ。それで、貯蓄の苦心が酬いられた。

洋行中の滞在費を余(あ)まして貯蓄するということは、尋常でない。滞在費は足らぬ勝ちで、追加をして貰う人が多い。反対に余して貯めたのは、前にも後にも大川平三郎一人だと云われて居る。それも母の苦心を少くしたいからの一心であった。今、その目的を達成して母の笑顔を見る。その喜びは何物にも優(まさ)った。

大川家は、常々、渋沢家から借金をする。それが返せなくて積って行く。それもまた母の苦勞であった。母は、その借金を全部返えした。それで気持が一度に晴れた。そして、このことが又、次の幸福を生んだ。

大川青年は、旧の如く、王子製紙に出社し、洋行知識を基礎にして種々改良した。そして大いに成績をあげた。然るところ、帰国してから半年ばかり後のことであった。渋沢家から「一寸来い」という使が来た。行つて見ると、それは天来の福音であった。

浅野総一郎が深川にある政府のセメント工場を七萬五千円で払下げる。それを大川と合併でやりたいというがどうだということであった。その方法は、浅野が三萬円出資して、大川が一萬五千円出資する。といつても、大川には金がない。渋沢が出資してやる。成功すれば幸い、失敗しても損は掛けない。大川から工場の運営を担当して貰いたい。商売は浅野がやる―というのであった。

浪沢の偉い信用である。それは洋行中に、貯蓄して来たからであった。それから、浅野は、どうして大川を見込んだかという、それは王子工場の接触からであった。

浅野は王子工場に石炭を納めて居た。その頃の石炭商は、言語同断であった。斤量を偽るため水をぶっかけるとか、箆に水を含ませるとか、送り込み中、わざと石炭をふり落して、あとで拾うとか、立会人にお茶菓子をお馳走するとか、悪事の数々を働き、それを智者として利巧ぶって居るのであった。

王子工場に職工をして居た大川青年は、石炭受取に立会った。その時、厳密の検査をする。だがその態度は軟かく商人の悪事を摘発するようなことはなく、諄々と運搬係をさとして、悪納入の根を絶つようなやり方をするのであった。浅野はそれに感心して、合併を申込んだのであった。

(一五)

浅野セメント会社は成立した。その時の会社は、匿名組織であった。総長が浅野総一郎、副総長が大川平三郎。時に大川二十二才、若い重役さんであった。

大川青年は、浅野セメントの副総長になっても、王子製紙の副総長になっても、王子製紙の勤務はやめなかった。夕刻五時まで王子工場に勤務し、それから馬に乗って深川の浅野セメントに駆けつけた。

でも大川はセメント屋にはなれず、一生製紙に終始した。

王子製紙をやめても、製紙業を捨てず、他の人の造った会社を整理発展させたり、自ら製紙会社を造って、それを経営したりした。紙の中に生長して、紙の中に死んだ。そして蓄財も一心掛けた。中年以後は、相当生活も派手になったが、それでも資本収入を生活費に繰入れるようなことはしなかった。生活費は、飽くまでも勤労収入を以てし、株式配当は使はぬという主義を死ぬまで押し通したのである。

そのために大川の財産は、復利式に伸びた。然も明治時代は金利が高いから、復利式だと非常な増殖になる。一割復利は七年に二倍、十四年に四倍、二十一年に八倍、二十八年に十六倍……四十九年に百二十八倍になる。七十才以上の長命を保った大川平三郎は、四十九年の百二十八倍には達したであらう。すると始めに十萬円あれば千二百八十萬になり、五十萬円あれば六千萬円になる。

大川の財産はそういう伸び方をした。大川は二度の洋行から帰ると、遠州の氣田に王子の分工場を建てた。それへ時々見廻りに行く。途中に箱根の温泉がある。何時もそこを素通りし、立寄って遊興するようなことはなかった。

これも大川在世中の自慢話の一つであった。左手がよく利き、両手を同時に動かして、右と左に文字の書き分けをするのが得意であった。

余戯に哥沢を歌う。一つ歌を繰り返してあかない。一生に一萬遍歌った哥沢が三つある由。それが愛唱の歌である。その一は、「ひと声」であったとか。

正調新内を好み妓を呼んで、その語るを聞く。語らすのは「かさね身売り」ときまって居た。彼も亦一種の変人であった。